

〈研究ノート〉

## 近代日本哲学史の描き方

### 船山信一の仕事を振り返る

笠松 和也

近代日本哲学史を描くという試みは、1930年代から見られる<sup>1</sup>。その先駆的な例が、三枝博音『日本に於ける哲学的観念論の発達史』（文圃堂書店、1934年）と戸弘柯三<sup>2</sup>（三枝博音）『近代日本哲学史』（ナウカ社、1935年）である。明治期における西洋哲学受容の性格を分析した両著作は、まさに近代日本哲学史研究の嚆矢に位置づけられうる。三枝自身はその後、『日本の思想文化』（第一書房、1937年）や『三浦梅園の哲学』（第一書房、1941年）の刊行、そして『日本哲学全書』全12巻（第一書房、1936-37年）の編纂に見られるように、その主たる関心をむしろ近代以前へと移していくが、彼の流れをくむ船山信一によって、「明治哲学史研究」「大正哲学史研究」「昭

---

1 本稿で扱う「近代日本哲学史」は、主に古代から近世までを扱う「日本思想史」とはさしあたり系譜を異にする。日本思想史に関しては、既に明治中期から井上哲次郎の「日本儒学三部作」をはじめ、連綿とした研究の伝統が存在する。三枝の仕事と同時代に発表された永田広志『日本哲学史』（三笠書房、1937年）や麻生義輝『近世日本哲学史』（近藤書店、1942年）も、確かに書名に「日本哲学」という表現が用いられているものの、内容からすれば、むしろ日本思想史の系譜に属するものである。ただし、江戸期の儒学者・国学者と明治前期の啓蒙思想家との連続性を指摘する日本思想史の研究成果は、船山の「明治哲学史研究」に取り入れられ、現在の近代日本哲学史においても言及される。

2 三枝博音の偽名の一つ。「戸弘（とひろ）」は「博音（ひろと）」のアナグラムになっている。また、「柯」は「枝」を意味する字であるため、「柯三」も「三枝」に対応している。

和哲学史研究」からなる本格的な近代日本哲学史が描かれることになる<sup>3</sup>。現在の近代日本哲学史研究も、明示的にせよそうでないにせよ、この船山の仕事に多くを負っている。

そこで、本稿では(1) 船山の仕事を振り返ることを通して、近代日本哲学史の描き方を再考するとともに、(2) 中でもとりわけ大正～昭和前期の学問状況をどう捉えるのかを考察してみたい。

## 1. 近代日本哲学史の枠組み

まず、近代日本哲学史の基本的な枠組みを確認することから始めたい。現在共有されていると思われる枠組みにおいては、近代日本哲学の発展は、大まかには三つの時期に区分される。代表的な哲学者の名前とともに示せば、次の通りである。

### 第1期 明治期 (明治啓蒙思想と西洋哲学の受容)

中江兆民、福沢諭吉、西周、加藤弘之、中村正直、西村茂樹、井上哲次郎、中島力造、元良勇次郎、三宅雪嶺、井上円了、清沢満之、大西祝

### 第2期 大正・昭和前期 (京都学派とその周辺)

西田幾多郎、田辺元、和辻哲郎、九鬼周造、波多野精一、山内得立、高坂正顕、務台理作、高山岩男、高橋里美、三木清、戸坂潤、本多謙三

### 第3期 戦後の哲学

田中美知太郎、大森荘蔵、廣松渉、坂部恵、井上忠、三宅剛一、下村寅太郎、中村雄二郎、市川浩、木村敏、井筒俊彦

一般に、第1期と第2期は、1911(明治44)年の西田幾多郎『善の研究』(弘道館)刊行を境に区分されている。同書の刊行が本格的な日本哲学の始まりとされ、それ以前は前史として扱われることになる。そのうえで、第2

3 船山信一『明治哲学史研究』(ミネルヴァ書房、1959年)、『大正哲学史研究』(法律文化社、1965年)、『昭和唯物論史』上下巻(福村出版、1968年)。なお、当初の構想では、これに加えて、『昭和観念論史』が書かれる予定だったが、結局未刊のままに終わった。

期においては、京都帝国大学文学部の哲学哲学史第一講座を担当した西田幾多郎とその後任である田辺元を中心としながら、その周辺の哲学者たちの思索が位置づけられる。

他方、第2期と第3期を分けるのは、1945（昭和20）年の終戦とそれに続く京都学派の公職追放である。これにより、京都学派の系譜が断絶することになる。そして、このことに呼応するかのように、「戦後の哲学」として括られる第3期は、むしろ学派を形成することのない多極性にその特徴が見いだされる。

近年の研究では、こうした枠組みに基づきながら、さらに第1期のうちに一元論的な観念論の性格を認め、そこに第2期との連続性を見いだすという見方に、改めて光が当てられている<sup>4</sup>。その際、鍵となるのが、井上哲次郎や井上円了が唱えた「現象即實在論」である<sup>5</sup>。

現象即實在論とは、われわれが経験において出会う「現象」と、その現象の根底にあり、それを可能にする「真實在」が同じものであると考える理論である<sup>6</sup>。これはカントの術語で言えば、現象と物自体、ないし現象界と叡智

4 Cf. 小坂国継『明治哲学の研究——西周と大西祝』（岩波書店、2013年）、上原麻有子「日本の哲学の連続性」『世界哲学史8——現代 グローバル時代の知』（伊藤邦武／山内志朗／中島隆博／納富信留編、ちくま新書、2020年）、209–228頁。

5 厳密に言えば、井上円了自身は「現象即實在論」という表現をほとんど用いていない。しかし、彼の「相含の論理」は現象即實在論にほぼ対応している。この点については、小坂『明治哲学の研究』第三部第二章を参照。なお、現在の円了研究においては、円了の「相含の論理」は、哲次郎の現象即實在論よりも発展したものだといえられる傾向にある。

6 現象即實在論において言われる「實在」とは、しばしば井上哲次郎自身によって「本体としての實在」と説明されるように、現象の根底にあり、それを可能にする真實在のことである。もっとも、「實在」という語が、現象において事物が存在するかどうかを指しているかのように誤解される恐れがあることは、哲次郎自身も論文「認識と實在との関係」の中で認めている（第七章第四節）。また、英語圏では、この語を訳す際に、西田幾多郎『善の研究』第二編における「實在」と同様に、*reality* という訳語を採用している（Cf. James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo eds., *Japanese Philosophy: A Sourcebook*, University of Hawaii Press, 2011）。ただし、哲次郎自身は、ここで言う「實在」の原語として *Wesen* を併記している（「認識と實在との関係」第二章第八節）。なお、哲次郎が1881（明治14）年に編纂した

界が同じものであると主張することに他ならない<sup>7</sup>。そこにおいては、カントをはじめとする二元論者たちが主張するように、現象と真実在が別個のものとして立てられるのではなく、同一の世界の「差別的方面」が現象であり、「平等的方面」が真実在であると捉えられる。その際、現象と真実在は、仏教から採り入れられた「即の論理」で結びつけられる。

のちに哲次郎自身は、1932(昭和7)年に発表した論文「明治哲学界の回顧」<sup>8</sup>の中で、自らの立場としての現象即实在論を位置づけ直すにあたって、古代以来の哲学史における实在論の発展を三段階にまとめている。第一の段階は、「一元的表面的实在論」ないし「素朴的实在論」であり、現象そのものを真実在とみなす立場がこれに相当する。この立場は、彼によれば、「もっとも低級な立場」である。第二の段階は、「二元的实在論」であり、現象とそれを可能にする真実在を区別した上で、真実在を「現象の彼岸に在るもの」として立てる立場である。彼の見るところ、カントをはじめ多くの哲学者がこの段階にとどまっている。そして、第三の段階こそが、「現象即实在論」ないし「融合的实在論」<sup>9</sup>である。ここにおいて、实在論は完成されたと、哲次郎は考えている。

しかし、こうした現象即实在論は、事柄そのものを考えるならば、あまりに多くの難点を抱えている。まず、「即の論理」そのものがいかなるものであるのか、とりわけドイツ観念論(特にフィヒテ)における自我論といかなる点で異なっているのかということについて、哲次郎や円了らは不明瞭なまま放置している。また、差別的方面からいかにして主観と客観の区別、形式としての空間と時間、因果をはじめとするカテゴリーが導出されるのかについても、哲次郎や円了らは積極的に論じていない。一切の規定性が「差別的方面」から出てくると主張しているだけである。それゆえ、現象即实在論がなぜこの現実世界を説明できていると言えるのかがよく分からない。これでは単なる思いつきと大差がなくなってしまう。

---

『哲学字彙』では、「实在」は「現体」とともに Being の訳語として記されているが、これはフェノロサが教科書として用いたヘーゲル『小論理学』英訳において見られる Wesen の訳語としての Being に由来する可能性がある。

7 Cf. 井上哲次郎「認識と实在との関係」第七章第五節。

8 井上哲次郎「明治哲学界の回顧」『岩波講座哲学』第11巻(岩波書店、1932年)。

9 「認識と实在との関係」においては、「融合的实在」のことを「一如的实在」とも呼んでいる。

結局、こうした発想が思いつきの域を出るには、西田幾多郎の登場を待たなければならない。実際、西田は主客未分の純粹経験から出発して、中期以降「場所」や「自覚」といった概念を彫琢しながら、自らの哲学体系を完成させていくが、こうした思考はある面では現象即實在論を完成させるものとして見ることができる。それゆえ、この点において、井上哲次郎や井上円了らの現象即實在論は、西田哲学の前史に位置づけられうるものとして捉えられる。近年注目されている明治期の哲学から京都学派の哲学への連続性も、この見方に基づいている。

しかしながら、こうした把握の仕方には源流が存在する。それが、船山信一の近代日本哲学史研究である。実際、船山は『日本の観念論者』（英宝社、1956年）ですでに井上哲次郎から西田幾多郎までを「日本型観念論」と括り、その根底に現象即實在論を見て取っている。だがその一方で、船山自身は、本節の冒頭で掲げた枠組みとは異なる哲学史観をもっている。そこで、われわれは次に、船山自身の哲学史観がどのようなものだったのかを確認することへと歩みを進めることにする。

## 2. 船山信一の近代日本哲学史観

船山の近代日本哲学史観がいかなるものであったのかを確認するにあたり、まずは船山が描く近代日本哲学史の全体的な構図を見ておきたい。次頁の図は、『大正哲学史研究』の冒頭に見られる「日本の近代哲学の発展段階」と題された整理である<sup>10</sup>。

船山の記述をもとに、この整理をやや敷衍して説明すれば、次のようになる。

(第一期) 1862（文久2）年における西周や津田真道らのオランダ留学を起点に、明治初期の日本に実証主義的な西洋哲学が輸入され、『明六雑誌』をはじめとする西らの啓蒙活動によって、国内に広められる。

(第二期) だが、国内における実証主義の思潮は、(a) スペンサーとダーウィン主義の影響を受け、進化論哲学を唱えた加藤弘之らの唯物論と、(b)

10 『船山信一著作集 第七巻 大正哲学史研究』（こぶし書房、1999年）、23-24頁。同じ整理は『哲学読本』（法律文化社、1963年）、176-178頁にも見られる。



始まり	文久2年
第一期 実証主義の移入	明治1年-15年
前期 啓蒙主義	明治1年-8年
後期 国権主義と民権主義との分化	明治8年-15年
第二期 観念論と唯物論との分化 (伝統的思想への再反省)	明治15年-22年
第三期 日本型観念論の確立 (国権主義と現象即實在論、ならびに批判的傍流)	明治22年-38年
第四期 第一次哲学啓蒙家 (哲学史・哲学概論)	明治28年-44年
第五期 日本型観念論の大成 (西田哲学の生成)	明治44年-大正15年
第六期 第二次哲学啓蒙家 (大正教養主義、大正ヒューマニズム、大正デモクラシー)	大正4年-15年
第七期 観念論の自己批判→唯物弁証法の展開・観念論の形而上学化 (観念論と唯物論との対立)	昭和2年-13年
第八期 日本哲学のファッション化	昭和6年-20年
第九期 唯物論・実存哲学・プラグマティズム→論理実証主義→分析哲学のてい立	昭和20年-

図 日本の近代哲学の発展段階

フェノロサによって導入されたカント・ヘーゲル哲学を踏まえた井上哲次郎や井上円了らの観念論に分化する。この時期には、それら両方の思潮において、伝統的な道徳や国体の観念が再考されることになる。

(第三期) 明治中期には、帝国大学文科大学の哲学科初代教授に就任した井上哲次郎が、現象即實在論を打ち出し、日本型観念論を確立させる。その一方で、哲次郎や三宅雪嶺らが日本主義を主張し始める。

(第四期) こうした動きと並行して、明治後半には、中島力造『列伝体西洋哲学小史』上下巻(富山房、1898年)や波多野精一『西洋哲学史要』(大日本図書、1901年)等を通して、西洋哲学史の本格的な受容が行われたほか、桑木巖翼『哲学概論』(東京専門学校出版部、1900年)をはじめ、大学での講義録をもとにした「哲学概論」が多数出版されるようになる。

(第五期) 明治中期に確立した日本型観念論は、西田幾多郎『善の研究』(弘

道館、1911年）および『自覚に於ける直観と反省』（岩波書店、1917年）で完成される。

（第六期）大正期においては、桑木厳翼らによる黎明会の活動をはじめ、大正教養主義・文化主義が打ち出されたほか、自我の内面性や生命主義を強調する大正ヒューマニズム、民本主義に立脚した大正デモクラシーが起こった。

（第七期）西田幾多郎の弟子の一人である三木清が、西田によって完成された日本型観念論を自己批判し、マルクス主義的唯物論に接近する。ここから、1932（昭和7）年に発足した唯物論研究会の活動を中心に、唯物論哲学が展開されていく。他方、西田や田辺元は日本型観念論を形而上学化していくことになる。

（第八期）こうした動きの傍ら、1931（昭和6）年の満州事変を境に、日本哲学のファッション化が進行していく。これはとりわけ終戦間際にピークを迎えることになる。

（第九期）戦後になると、梯明秀らの新たな唯物論哲学、ヤスパース・ハイデガー・サルトルらの実存哲学に加えて、英米圏の思潮と呼応するように、プラグマティズムから論理実証主義、そして分析哲学へと至る流れが展開される。

船山がこうした哲学史を描く動機は、いかなる思想が昭和前期の唯物論を条件づけていたのかを探索することにある<sup>11</sup>。実際、この整理における最大の特徴は、日本型観念論の形成・完成・自己批判を軸に、それと対抗して展開されていく唯物論哲学の発展を描き出している点にある。そこでは、江戸期の儒学から明治前期の実証主義へ、明治前期の実証主義から日本型観念論へ、日本型観念論から昭和前期の唯物論へと、先立つ時期の思想が次の時期の思想を何らか条件づけていることが強調されている。

このような哲学史観は、船山自身が影響を受けた三枝博音の近代日本哲学史から生まれてきたものである。三枝は『日本に於ける哲学的観念論の発達史』の中で、明治・大正期におけるカント・ヘーゲル受容を概観すること

11 これは、かつて唯物論研究会の若き論客だった船山自身が、戦後にマルクス主義から距離を置く一方で、『フォイエルバッハ全集』（福村出版、1973-76年）の翻訳に尽力し、その哲学に立脚しながら、マルクスの唯物論から区別された人間学的唯物論を確立しようとしていたことと連動している。

を通して、(1) 明治期においてドイツ観念論が移植されたことから、明治・大正期におけるアカデミズム主流派の思潮が、観念論の性格を帯びるようになったこと、(2) その一方で、ドイツ観念論の主導理念である「神性 (Gott-heit)」がドイツの精神土壌から切り離されて抽象的に捉えられたことにより、明治中期における日本の観念論が反動的なイデオロギーとしての国粹主義と結びついてしまったことを指摘している<sup>12</sup>。また、『近代日本哲学史』の巻末に付された付録では、「わが国では何故弁証法が発達しなかったか？」という問いを掲げた上で、その原因を儒学などの旧来の学問の中に、封建的な上下関係が持ち込まれていることに求めている。三枝によれば、近代的な学問の発展のためには弁証法が成立する必要がある、そのためには否定性を乗り越えることを可能にする水平的な市民の関係が確立されていなければならないのである。それゆえ、市民社会がまだ確立していない明治期においては、確かに唯物論は存在していたものの、弁証法を伴わない素朴な唯物論に過ぎなかったとされる<sup>13</sup>。

船山の功績は、こうした三枝の哲学史観を下敷きにしながら、さらに明治・大正期におけるアカデミズム主流派の思潮を「日本型観念論」として捉え直した上で、日本型観念論の確立・完成・自己批判という契機を、それぞれ井上哲次郎・西田幾多郎・三木清の中に見いだしたことにある。これにより、明治期の哲学の位置づけを明確にすると同時に、西田哲学の根本的な動機の一つを解明した。しかしその一方で、日本型観念論という捉え方は、西田哲学に独特な位置づけを与えることになる。そのため、船山の哲学史観は、とりわけ上田閑照以降に積み重ねられてきた西田哲学の研究と単純には接続することができないという問題をはらんでいる。

こうした船山の哲学史観に対して、現在共有されていると思われる近代日本哲学史の枠組みでは、井上哲次郎から西田幾多郎へと受け継がれる現象即実在論の系譜を見いだしたことに一定の評価を下すものの、西田哲学そのものを「日本型観念論」の枠内で捉えることは明確に避けている<sup>14</sup>。むしろ大

12 Cf. 『三枝博音著作集 第三巻』(中央公論社、1972年)、19-20頁。

13 Cf. 『三枝博音著作集 第三巻』、243-252頁。

14 藤田正勝『日本哲学史』(昭和堂、2018年)、熊野純彦編『日本哲学小史』(中公新書、2009年)、James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo eds., *Japanese Philosophy: A Sourcebook* (University of Hawaii Press, 2011) では、井上哲次郎らの現象即実在論がある面において西田幾多郎の純粹経験に受け継がれたことを指摘



正期以降については、船山の整理は採用せず、戦後から現在までの京都学派研究を接続している。それゆえ、現在の近代日本哲学史の枠組みは、船山の整理を反映した明治期と、戦後の京都学派研究を反映した大正期以降からなるハイブリッド型の枠組みになっている。その点で、現在の枠組みは今後大いに変わる可能性がある。

### 3. 大正～昭和前期の哲学をどう捉えるのか

以上の議論を踏まえた上で、さらにとりわけ大正～昭和前期の哲学をどう捉えるのかを考察するため、(1) 船山信一、(2) 藤田正勝、(3) ジェームズ・ハイジックらの近代日本哲学史における整理の方針を比較してみたい。

#### (1) 船山信一の場合

船山は『大正哲学史研究』冒頭で、大正哲学の基本性格を次のように記述している。「明治は国家の時代、昭和は社会の時代であるとすれば、大正は個人・自我の時代である」<sup>15</sup>。船山によれば、大正期は「内面的個性の原理」が探究された時代であった<sup>16</sup>。実際、この時期には、朝永三十郎『近世に於ける「我」の自覚史——新理想主義と其背景』（東京宝文館、1916年）、紀平正美『自我論』（大同館書店、1916年）、阿部次郎『人格主義』（岩波書店、1922年）をはじめ、自我や人格を主題にした哲学書が多数刊行された。また、阿部次郎『三太郎の日記』（岩波書店、1915年）、倉田百三『愛と認識との出発』（岩波書店、1921年）、出隆『哲学以前』（大村書店、1922年）などの随筆にも、この傾向が顕著に現れている。そうした思考こそが大正ヒューマンイズムを形

---

するものの、「日本型観念論」という説明図式は採用していない。

15 『船山信一著作集 第七巻 大正哲学史研究』、16頁。

16 ただし、明治期においても、大西祝だけはその主著『良心起原論』において例外的に「内面的個性の原理」を探究したと船山は評価している。「実は大西の『良心起原論』は日本の近代哲学史において、はじめて内面的個性を宣言したものである」（『船山信一著作集 第七巻 大正哲学史研究』、39頁）。しかし、大西は若くして亡くなったため、この思考は「ただ彼ひとりだけにおける孤立した現象」（Ibid.）にとどまったとされる。なお、船山が見いだした大西のこうした例外性に対して、近年小坂国継は大西『良心起原論』から西田『善の研究』へと至る「明治期の倫理学」の系譜を掘り起こそうとしている（Cf. 『明治哲学の研究』第二部）。

成したと船山は評価している。しかし、その思考は第一次世界大戦、ロシア革命、シベリア出兵、米騒動、普通選挙運動を背景に展開された大正デモクラシーと交錯することなく、「アカデミーにとじこもっていて、社会、大衆、ジャーナリズムからさえも切断されていた」<sup>17</sup>とされる。

明治中期に井上哲次郎らが確立した日本型観念論が完成されるのも、こうした思潮の中においてである。船山はその画期を西田幾多郎に見いだす。先にも述べたとおり、西田の言う主客未分の純粹経験は、一面において現象即実在論を受け継いだものとして考えることができる。この系譜に対して西田が独自に貢献したことは、大正期特有の内面的個性の原理を論理化し、井上哲次郎らが用いていた「即の論理」に代わる哲学的な原理として打ち立てたことである。『善の研究』（1911年）において、初めてそうした原理の下で、純粹経験が分析されることになる。だが、船山によれば、『善の研究』の段階では、まだ直観を重視する主観主義の立場にとどまっている。これに対して、同書に続く『自覚に於ける直観と反省』（1917年）では、こうした「直観」と新カント派的な「反省」との総合としての「自覚」が考えられる。ここにおいて日本型観念論が完成したと、船山は捉えている。

こうして完成された日本型観念論が転換点を迎えるのは、三木清においてである。船山によれば、西田の弟子の一人である三木は、日本型観念論の立場から出発しつつも、それを自己批判し<sup>18</sup>、唯物史観と交渉する中で、唯物史観の人間学的基礎づけを試みた。これにより、大正前期においてもつばら唯物史観の観点から捉えられ、哲学と結びつかなかった福本和夫や河上肇らの唯物論が、大正末期にまさに三木の思索を契機にして哲学と結びつき、さらに昭和前期において戸坂潤や本多謙三らが自然弁証法を展開していくことになる。この点で、三木による日本型観念論の自己批判は、唯物論哲学の道を切り拓いたと評価される。

---

17 『船山信一著作集 第七巻 大正哲学史研究』、17頁。

18 この自己批判は、観念論と唯物論を対決させるという理論的なものであると同時に、現実政治から超絶したアカデミズムの姿勢に変革を迫るという実践的なものでもあった。「三木清はかくてアカデミーの殿堂で春眠をむさぼっていた哲学者に向って警鐘を乱打した。彼によって哲学者は花園から荒海へ引き出されたのである。彼は哲学といえばアカデミー、とくに官学のものであったに対して、民間に、ジャーナリズムに哲学を樹立した。民間アカデミーというのが彼の一つの夢であった」（『船山信一著作集 第八巻 日本の観念論者』、225頁）。

その一方、西田幾多郎や田辺元らの方は、昭和前期において、日本型観念論を形而上学化していくことになる。これについては、未刊に終わった「昭和観念論史研究」で扱われる予定であり、船山は現存する著作で詳述していない。そのため推測するしかないが、おそらくここで念頭に置かれているのは、西田幾多郎については『働くものから見るものへ』（1927年）、とりわけその後編に収録されている論文「場所」以降、弁証法的一般者から絶対矛盾的自己同一へと歩みを進めていく思考であり、田辺元については「種の論理」による社会存在論を展開していく思考であろう<sup>19</sup>。こうして、昭和前期において、(a) 自然弁証法へと向かう唯物論哲学と (b) 形而上学化された日本型観念論という二つの潮流が見いだされることになる。

ところが、戦時期においては、日本哲学のファッション化が起きてしまう。これには、明治期以来の日本主義の急進化、マルクス主義からの転向など、さまざまな形態があったが、総じて見れば、これらはすべて全体主義の中に巻き込まれたと捉えられる。これについても船山自身は詳述していないが、その一部は論文「昭和前期の日本主義哲学」で論じている。そこでは、紀平正美、和辻哲郎、蓑田胸喜、鹿子木員信らの思想と、昭和前期に展開された「生みの哲学」が扱われている。また、この論文では触れられていないものの、『大正哲学史研究』で示される「西田哲学の発展段階」の表を見るかぎり、1940（昭和15）年から1945（昭和20）年にかけての西田の思考にも注目しようとし

---

19 『大正哲学史研究』の中で示される「西田哲学の発展段階」の表によれば、『働くものから見るものへ』所収の論文「場所」を境に、西田はそれ以前の「現象学的心理主義的時代」から「存在論的論理的時代」へと移行したと捉えられている（『船山信一著作集 第七巻 大正哲学史研究』、290-291頁）。また、『大正哲学史研究』で主に扱われる西田哲学が、『自覚に於ける直観と反省』までであることを合わせて考えれば、論文「場所」以降を「昭和観念論史研究」で扱う予定であったと推測できる。また、服部健二の証言から、「昭和観念論史研究」を準備していた船山が、西田、田辺、和辻、三木の全集を読み直していたことが分かる。「前年に心臓病で倒れられてから、船山は、徐々に昭和観念論史に取り組もうとされていたのですが、恐らく一九七八（昭和五十三）年からは、体と相談しながらその仕事を継続し、その合間に講義集 [=フォイエルバッハの講義集（引用者注）] を少しずつ読んでいかれたと思います。この年には、三木清、和辻哲郎、西田幾多郎の各全集を読み、一九七九（昭和五十四）年の年頭からは田辺元の全集を読まれたのですが、[...]」（服部健二『西田哲学と左派の人たち』こぶし書房、2000年、237頁）。

ていたようである<sup>20</sup>。

## (2) 藤田正勝の場合

藤田正勝は『日本哲学史』(昭和堂、2018年)において、明治期以降の近代日本哲学史を大きく三つの時期に分けている。

第一部 受容期——明治の哲学

第二部 形成期——大正・昭和前期の哲学

第三部 展開期——終戦後の哲学

そのうち、第二部は次のような構成になっている。

第二部 形成期——大正・昭和前期の哲学

第一章 大正・昭和前期の思想状況

1 大正という時代

2 昭和前期の思想状況

第二章 西田哲学と田辺哲学

1 西田幾多郎の前期の思索

2 田辺元の思想形成と西田哲学批判

3 後期西田哲学

4 田辺元の「種の論理」

第三章 西田・田辺と同時代の哲学のさまざまな展開

1 高橋里美

2 九鬼周造

3 和辻哲郎

4 美学研究の発展

20 「西田哲学の発展段階」では、この時期における西田の思考の一部を「国体論と宗教的世界観」という括りでまとめている。それが現れている著作としては、『日本文化の問題』(岩波書店、1940年)のほか、論文「国家理由の問題」(1941年)、「世界新秩序の原理」(1943年)、「国体」(1944年)、「場所的論理と宗教的世界観」(1945年)を挙げている。舩山はこうした著作に見られる思考について、皇道主義を乗り越えようとしつつも、結局それと妥協し、新たな基礎づけに寄与してしまっていると評価している(『舩山信一著作集 第七巻 大正哲学史研究』、284頁)。

## 5 宗教の哲学

## 第四章 西田・田辺の弟子たち

- 1 禅の伝統——久松真一・西谷啓治
- 2 現象学・歴史哲学・社会存在論——山内得立・高坂正顕・務台理作
- 3 構想力の論理——三木清
- 4 マルクス主義への接近——戸坂潤・梯明秀
- 5 多様な分野への展開——木村素衛・高山岩男・土田杏村・下村寅太郎

## 第五章 京都学派

- 1 京都学派とは
- 2 近代の超克

藤田は明治期における井上哲次郎らの現象即實在論から西田哲学への連続性を一面においては認めるものの、井上哲次郎・西田幾多郎・三木清に画期を見いだす「日本型観念論」の枠組みは採用していない。むしろ大正期・昭和前期の哲学については、主に「京都学派とその周辺」と整理している。その点で、本稿の第2節末尾で示したように、明治期の現象即實在論に注目する船山の研究と、上田閑照以来の京都学派研究を接続させたハイブリッド型の哲学史を描いているといえる。

しかし、これに加えてもう一つ特徴的な点がある。それは、「京都学派」をいかなるものとして捉えるのかという問いに関わる。この問いについて、「京都学派」として括られる哲学者たちの思考に共通の特徴を見いだそうとするジョン・マラルドの理解に対して<sup>21</sup>、藤田は「知的ネットワークとしての京都学派」という竹田篤司の定義を提示している。その定義にしたがえば、京都学派は、西田・田辺を中心に、共通の問題をめぐる議論を通じて思想形成をしていった思想家たちの集団と捉えられることになる。

ただし、藤田はここに三つの修正を加えている<sup>22</sup>。第一に、竹田が西田や田辺との直接的な師弟関係を念頭に置いていたのに対して、藤田は波多野精

21 他方、藤田はこの定義には思想内容を考慮していないという問題点があることを指摘した上で、マラルドの言うように、京都学派の哲学を「無の哲学」と捉えることにも一定の意義があることを認めている（『日本哲学史』、341-342頁）。

22 Cf. 『日本哲学史』、340-341頁。



一、九鬼周造、和辻哲郎ら、そうした師弟関係から外れる思想家たちも含めることを提案している。第二に、竹田の定義において、戸坂潤や梯明秀ら、西田に批判的であった唯物論哲学者たちが含まれていないのに対して、藤田は彼らも西田との対決を経て思想形成をしたという点で、知的ネットワークとしての京都学派の中で捉えるべきであると主張している<sup>23</sup>。第三に、竹田は西田・田辺とその直接の弟子たちの世代だけを京都学派として捉えるのに対して、藤田は西田・田辺の強い影響を受けたその次の世代も京都学派として捉える可能性を提起している。

こうした「知的ネットワークとしての京都学派」という捉え方は、西田・田辺を中心とした知的交流の全体像を解明することを目指している。この解明作業は、西田哲学とマルクス主義との関係<sup>24</sup>など、比較的これまで注目されてこなかった隠れた水脈を近代日本哲学史の中に位置づけることに寄与するはずである。

### (3) ジェームズ・ハイジックらの場合

ハイジックらが編集した日本哲学の英訳資料集 *Japanese Philosophy: A Sourcebook*<sup>25</sup> では、古代から現代までの日本の哲学者・思想家たちを取り上げ、その紹介と著作からの抜粋英訳を載せている。明治期以降の哲学を扱った「近代アカデミア哲学」の章では、次のような整理の下で、哲学者・思想家たちが紹介されている。

#### 始まり・定義づけ・論争

西周／福沢諭吉／中江兆民／井上哲次郎／井上円了／大西祝

#### 京都学派

西田幾多郎／田辺元／務台理作／三木清／高坂正顕／西谷啓治／下村寅太郎／高山岩男／武内義範／阿部正雄／辻村公一／上田閑照／長谷

23 この点は、観念論と唯物論の対比を鮮明に描き出そうとする船山の哲学史観と真正面からぶつかることになる。

24 西田哲学とマルクス主義とのある種の近さについては、すでに三枝が『近代日本哲学史』の中で指摘している（Cf. 『三枝博音著作集 第三巻』、234–236頁）。この論点については、船山の流れをくむ服部健二の研究に受け継がれている。

25 James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo eds., *Japanese Philosophy: A Sourcebook*, University of Hawaii Press, 2011.

正當／大橋良介

## 20世紀の哲学

波多野精一／阿部次郎／高橋里美／九鬼周造／和辻哲郎／三宅剛一／  
戸坂潤／市川白弦／今西錦司／舩山信一／滝沢克己／家永三郎／井筒  
俊彦／丸山真男／源了圓／大森莊蔵／湯浅泰雄／中村雄二郎／木村敏  
／廣松渉／坂部恵／藤田正勝

ハイジックらは「近代アカデミア哲学」を三つの区分に分けている。このうち、「始まり・定義づけ・論争」と「京都学派」については、井上哲次郎の現象即實在論から西田哲学への連続性に言及する一方で、大正期以降に「京都学派」という項目を立てるという点で、藤田正勝の場合と同様に、ハイブリッド型の哲学史を描いているといえる。

ところが、これに加えて「20世紀の哲学」という区分が立てられている。ここに同書の特徴がある。こうした整理をする意図について、ハイジックらは「20世紀の哲学」という区分の「概要（Overview）」で、「日本の学者たちは、自分たち自身のインテレクチュアル・ヒストリーを描く際、日本史一般と同じ区分に従う傾向がある」（p. 801）と述べた上で、そうした傾向が（1）元号による時代区分、（2）日本の近代化による時代区分、（3）戦前・戦中・戦後による時代区分を無批判的に哲学史の中に持ち込んでしまうと、その問題性を指摘している。

こうした問題に対して、同書では従来の歴史カテゴリーを廃した上で、京都学派から外れる大正期・昭和期の哲学者・思想家たちをひとまとまりの「20世紀の哲学」として扱っている。また、それぞれの区分の中においても、哲学者・思想家たちを生年順に並べることで、先入見を与えるような分類を排除している。

近代日本哲学の始まりが19世紀後半であることを考えれば、これは一見するときわめて大雑把な分類であるかのように思えるが、かえって「20世紀の哲学」と括ることによって、欧米における「20世紀の哲学」との連関が見えやすくする効果がある。従来の近代日本哲学史研究が、西田哲学研究から進展したという事情から、どうしても戦後における京都学派の公職追放という出来事に重きを置かざるをえなかったことを考えれば、戦前から戦後を連続的に扱おうとするこうした発想は盲点だったといえる。

以上見てきたように、これら三者の捉え方はまさに三者三様で、それぞれに異なる利点を有している。われわれは三者の性格を踏まえた上で、多様な視点から近代日本哲学史を見ていく必要があるだろう。

#### 4. 今後の課題

最後に、前節で見た三つの哲学史においてもなお捉えきれない視点として、(A) 横断的視点、(B) 多分野的視点、(C) 東アジア的視点の三つが残されていることを、具体的な事例を提示しながら指摘しておきたい。

##### (A) 横断的視点

20世紀前半のヨーロッパにおけるヘーゲル復興運動<sup>26</sup>を受けて、日本でも1920年代後半からヘーゲルの読み直しが活発化した<sup>27</sup>。その顕著な現れが、ヘーゲル没後100周年を記念して編集された論集『ヘーゲルとヘーゲル主義』(国際ヘーゲル連盟日本支部編、岩波書店、1931年)<sup>28</sup>の刊行である。その後、田辺元『ヘーゲル哲学と弁証法』(岩波書店、1932年)、務台理作『ヘーゲル研究』(弘文堂書房、1935年)、高山岩男『ヘーゲル(西哲叢書)』(弘

26 「新ヘーゲル主義」とも呼ばれるこの運動は、ディルタイの著作『ヘーゲルの青年時代(Die Jugendgeschichte Hegels)』(1905年)やヴィンデルバントの講演「ヘーゲル主義の復興」(1910年)を端緒とし、20世紀前半においてドイツ国内だけでなく、イギリス・フランス・イタリアにも広まった。日本においては、第一次世界大戦後にドイツに留学した人々を通して本格的に知られるようになる。

27 『哲学雑誌』においては、「ヘーゲル」という人名がタイトルに入った論文は、1909年に発表された元良勇次郎「ヘーゲルの存在論に就て」を境に一時的に見られなくなる(ただし、雑録には1912年に宮本和吉による「ヘーゲリアニズムの復興(ウィンデルバンド)」という報告が見られる)。だが、1929年に発表された金子武蔵「ヘーゲルの弁証法に関する一考察」を皮切りに、タイトルに「ヘーゲル」を冠した論文が続々と掲載されるようになる。また、1931年には、第46巻第538号でヘーゲル特集を組んでいる。ここには、桑木巖翼「ヘーゲルの背後に在るもの」、紀平正美「日本精神とヘーゲルの弁証法」、田辺元「ヘーゲル判断論の理解」が載っている。

28 後述の西田の論文のほか、田辺元「ヘーゲルに於ける理性的と現実的との一致」、三木清「弁証法の存在論的解明」、大西克礼「ヘーゲルの美学と浪漫主義」、高橋里美「ヘーゲル主義と新カント主義」等が収録されている。

文堂書房、1936年）の刊行が続いた。また、西田幾多郎も、論文「私の立場から見たヘーゲルの弁証法」（1931年）<sup>29</sup>を通して、ヘーゲル弁証法と対決する中で、自らの立場である絶対矛盾的自己同一を構想していくことになる。

しかし、これと同時期に、のちに日本主義の理論的支柱となる紀平正美もまた、こうした動きとは独立に、ヘーゲル弁証法との対決を試みている。1920年代後半から1940年代前半にかけて、紀平は（a）「なる」（＝生成）の論理を精緻化することで、ヘーゲル弁証法を完成させると同時に、（b）『古事記』を出発点にしながら歴史の弁証法を通じて「皇国史観」を樹立する、という二つのプロジェクトを構想していた<sup>30</sup>。

現在の近代日本哲学史の枠組みにおいては、西田や田辺らの思索は「京都学派」、紀平の思索は「日本主義」という括りの中で別々に捉えられるが、その一方でヘーゲル弁証法に不完全性を見だし、東洋思想の発想を手がかりに、ヘーゲル弁証法を完成させることを目指したという点は、西田にも紀平にも共通している。こうした大きな傾向を捉えるには、従来の枠組みを超えて分析する必要がある。

## （B）多分野的視点

大正・昭和前期は、日本思想史や上代日本文学の研究が比較的に進展した時期でもある。その代表例としては、津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』全4巻（洛陽堂、1919-21年）、『古事記及び日本書紀の新研究』（洛陽堂、1919年）、『神代史の研究』（岩波書店、1924年）、久松潜一『萬葉集の新研究』（至文堂、1925年）、『上代日本文学の研究』（至文堂、1928年）、村岡典嗣『本居宣長』<sup>つねつぐ</sup>（岩波書店、1928年）<sup>31</sup>が挙げられる。

また、これと並行して、日本思想史関連の校訂テキストも続々と刊行され

29 初出は『ヘーゲルとヘーゲル主義』（国際ヘーゲル連盟日本支部編、岩波書店、1931年）。のちに『続思索と体験』（岩波書店、1937年）に収められた。

30 このプロジェクトの集大成といえるのが、『なるほどの哲学』（国民精神文化研究所、1941年）、『なるほどの論理学』（国民精神文化研究所、1942年）、『皇国史観』（皇国青年教育協会、1943年）の三著である。

31 同書はすでに1911年に警醒社から刊行されていたものの増訂版である。警醒社版は刊行当時あまり注目されなかったため、本格的に同書が読まれるようになるのは、この岩波書店版の刊行からである。

る。とりわけ日本主義と結びつきやすい『本居宣長全集』<sup>32</sup>や『葉隠』<sup>33</sup>は、大正・昭和前期において複数の校訂版が刊行されている。さらに、1924（大正13）年から1934（昭和9）年にかけては、膨大な数の漢訳仏典を収集・校合した『大正新脩大藏經』全88巻（大正一切経刊行会編）が刊行され、その後の仏教学研究の基盤となった<sup>34</sup>。

このような研究動向の進展や出版状況の変化を背景に、井上哲次郎、紀平正美、和辻哲郎をはじめ、西洋哲学を背景とした思想家たちが、積極的に日本思想史や上代日本文学について論じ、かつそこで得た着想を自らの思索に生かそうとしている。こうした思索を分析するには、歴史学や文学を含めた多分野からの視点を導入しなければならない。

### (C) 東アジア的視点

大正・昭和前期の日本は、朝鮮半島、中国東北部（満州）、台湾への進出に伴い、1924（大正13）年に京城帝国大学、1928（昭和3）年に台北帝国大学を設立した。哲学関連の教員としては、京城帝国大学法文学部には、安倍能成（哲学哲学史）、宮本和吉（哲学哲学史）、上野直昭（美学美術史）、速水滉（心理学）ら、台北帝国大学文政学部には、務台理作（哲学哲学史）、

32 『本居宣長全集』については、明治期から昭和前期にかけて、以下の校訂版が刊行された。佐々木信綱編『本居宣長翁全集』（博文館、1898年）、本居豊穎校訂『本居宣長全集』全6巻（吉川半七、1901-03年）、本居清造編・本居豊穎校訂『増補本居宣長全集』全10巻（吉川弘文館、1926-27）、村岡典嗣編『本居宣長全集』第1-3冊・第25-26冊のみ（岩波書店、1942-44年）。

33 『葉隠』については、明治期から昭和前期にかけて、主に以下の校訂版が刊行された。中村郁一編『葉隠』（丁酉社、1906年）、大木陽堂編『鍋島論語 葉隠全書』（教材社、1936年）、山村魏校訂『葉隠』全3巻（三教書院、1937年）、栗原荒野編『校註葉隠』（内外書房、1940年）、和辻哲郎・古川哲史校訂『葉隠』全3巻（岩波文庫、1940-41年）、大木陽堂訳『現代語訳葉隠全集』（教材社、1940年）。

34 仏教学者の下田正弘らのプロジェクトチームにより、近年『大正新脩大藏經』第1巻～第85巻の電子テキストが作成され、「SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース」（<https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>）において公開されている。同データベース構築の経緯については、下記を参照。下田正弘・永崎研宣編『デジタル学術空間の作り方——仏教学から提起する次世代人文学のモデル』（文学通信、2019年）。なお、同書は「文学通信リポジトリ」（<https://repository.bungaku-report.com/>）で全文オンライン公開もされている。



<sup>だんの</sup>淡野安太郎（哲学哲学史）らがそれぞれ赴任している。両大学とも日本人学生が半数以上を占めたものの、それでもなお現地出身の学生たちにおいて重要な知的交流が起こっていた。

その例として、藤田正勝は『日本哲学史』の中の「務台理作」を扱った節で、二人の人物を挙げている。一人は、京城帝国大学において安倍能成や宮本和吉の下で哲学を学んだ朴鐘鴻（<sup>パクチョンホン</sup>1903–1976）であり、もう一人は、東京帝国大学で学んだ後に帰国し、台北帝国大学において務台理作の下で文政学部哲学科の助手を務めた洪耀勳（<sup>こうようくん</sup>1902–1986）である。こうした事例は最近注目され始めたばかりであるため、今後全面的に発掘する必要がある<sup>35</sup>。

これら三つの視点を踏まえて近代日本哲学史を捉えるにあたっては、いずれにせよ当時の知的ネットワークの全体像を解明することが必須となる。そのためには、個々の哲学者・思想家の著作だけでなく、彼らの知的交流から生まれた論文集や雑誌等の包括的な調査が必要とされる。われわれが進めている『哲学雑誌』の分析もそれに寄与するはずである<sup>36</sup>。

---

35 これについては、藤田も参照している高坂史朗『東アジアの思想対話』（ペリカン社、2014年）が、探究の出発点になる。

36 東京大学人文社会系研究科・文学部哲学研究室では、2017年頃から『哲学雑誌』のバックナンバーを調査するプロジェクトを進めている。その成果の一部は、哲学研究室のウェブサイト（<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/philosophy/seika.html>）で公開されている。